

復活節講筈

キリストの復活の秘義

2003年4月13日（東京新宿）

今も生きて働いている霊的実在者

私はこの復活節集会はとても大事な集会だと思っています。ここに集われた方々は、大げさに言えば、キリストに生命を捧げるといふ気持ちで来られたと思います。キリストに生命を捧げる方にこそ、キリストはご自分の生命を豊かに宿らせ、芽生えさせ、新しく本当のキリストの姿に我々を変えていつてくださる。キリストの恵みというのは、無条件絶対の恵みですけれども、これをいい加減な気持ちで受けとる人には、これは勿体なもったいなさすぎるんです。

「豚に真珠を投げるな」

というひどい言葉がありますけれども、私はちつともひどいとは思わない。もちろん、「豚」には気の毒ですけれども、「全くその価値のわからない者」というふうに受けとっていただいていい。あまりにも大事なものが、全くわからない人の所に差し出されて、踏みにじられ

て、けとばされて捨てられる。これはそれを大事にする人間から見ましたら、堪えられないことです。そのくらいこれは尊い宝物です。イエス・キリストのご復活を中心としたキリストの生涯、これは本当に私たちに与っては宝物です。ところが、この宝物であるキリスト、主さまのご生涯というものは非常に隠されたものなんです。

さきほど、イラク戦争の話とか、自分たちの日々の関心がどうしてもそつちへ向かうとかいうお話がありました。敗戦を経た日本の当時を生きた人間としては、誠に無理からぬ止むを得ないところだと思えますけれども。私は、それに囚とらわれることに対しては「ノー」と言います。「キリストに囚とらわれてほしい」と言いたい。

「だからこそ、キリストに囚とらわれてほしい」

と、私は申し上げたいんです。残酷な言い方かもしれないけれども。キリストを知らない方は、「平和運動」ということで一生懸命やります。けれども、我々、キリストにしがみついている人間にとつては、それを乗り越えて、本当にこのキリストが全世界にしみ込んでくださらなければ、現象的に戦争が起きたり終つたりしても、それは本当の解決ではないということです。我々はああいうことが起こらないことを願わない者はない。願わない者はないけれども、現に起こってしまう。

我々はいったどこに目をつけているのかということ、私は本当に狂える如くに思う。我々はイエス・キリストから目を離したら、とんでもない所へ行ってしまうということです。

私たちは寝ても醒めてもイエス・キリストです。その方の中に生き、その方と共に生き、その方と運命共同体である。その中から祈り、叫び、振舞うという、その原点がなくなつたら、それは外的まははになつてしまう。キリストはちつとも喜ばれないと思います。それだつたら、この世の人と全く変わらないですから。私はそのくらいにキリストにいわば夢中になつていきますし、またなりたいし、そのために人に棄いてられても厭いとわない。

キリストは人に棄いてられた。彼らは善を願っている人たちだった。パリサイ人びとたちも当時のイスラエルもみな自分は神に選ばれた選民だと自負して、自分たちこそ神のオーソドックス(orthodox 正統的)な、神の国の後継者と自負していた。そして、あのイエス・キリストというけしからん、伝統を破壊し、自分たちの先祖以来の言い伝えを破壊する者を、

「己を神の子と称し、イスラエルの宗教を破壊する、あの者を殺せ！」

と言つて、本当に熱中した。民衆も巻き込まれて、声を一つにして、

「イエスを十字架につけろ、十字架につけろ！」

と叫んだ。それは決して宗教家たちだけではありません。民衆も全部です。あの救いを受けた、恵みを受けた民衆たちがこぞつて、

「イエスを十字架につけろ、バラバをゆるせ！」

と言つてきかなかつた。イエスはただ独り十字架につかれた。弟子たちも逃げてしまった。そういう現実というものを、私たちはただ歴史的な二千年前にイスラエルの地であんなこと

が起こった——当時、新聞があつたら新聞記事に載つたりして、すぐ忘れ去られてしまう——そんな出来事なのか。それとも、現に今、我々に迫ってきている霊的な現実なのか。今も我々に食い込んでくる根源現実を受けとつていかなかったら、復活節を迎えている意味は全くありません。

ところが、「肉」なる我々の思いというのは、追憶の彼方にすべてを流し去ろうとする。私たち人間というものを考えてみてください。もし、イエスさまがいらつしやらなかつたら、私たちはどうでしょうか。すべて死をもつてその人生は終り、

「その人の生涯は棺かんに蓋ふたをするまではわからない」（棺かんを蓋おおいて事定まる）

とよく言います。死ぬことによつてその人の人生は完結する。そして、その死んだ人の生まれてから亡くなるまでの生涯をずっと辿たどつて、「この人の生はこういうものだった」というふうに完結的なものとして見て、それを追憶し、「ああ、あの方のように生きたい」という追憶の対象ではあつても、

「今、現に生きて働きたもう」

という、そういうものとしては、我々は受けとれないんです。

キリストを知らない方、そういう方々は愛する者と別れた時、愛する者を天に送つた時、すべて追憶の中に生きようとしています。それを思い出させる数々の品々や遺品——それも別れが辛い時にはそれも葬ります——けれども、その人が愛いとしくて、その人をいつまでも覚えた

い時には、その遺品をいくつも大事にして、アルバムを開きその人の声を聞き、そして時にはお墓に行き、その人を偲しのびます。けれども、その方の中でその人が本当に、

「今も生きて働いてくれている霊的実在者、存在として受けとれるか」

と。これはその人その人の受けとり方次第だと思う。抛り所がない。そう思いたい。

「いや、彼は私の中に生きている。私の胸の中にいつまでも生き続けている。別れてのち、いよいよ新たに」

とか思いますが、それは本当に根拠のあるものかと言われたら、誰もわからない。

「罪と死」という問題

それを本当に根拠あるものだと言って、ドーンと後押ししてくださる方は正に甦よみがつてくださったキリスト・イエスそのお方です。そのお方と本当に我々が一つであるときに、そういう向こうの实在界、それが私たちの中に切り込んできて、私の中に拠点をつくつて、そこで向こうの世界と今の私の現実とが一つになって生きていける。これは主しゅさま（イエスさま）から目を離れたら、もうダメです。主さまとの太いパイプがあつてこそ、私たちは日々新たにこの永遠の生命の中に活かされているということが実感できるんです。

もし、一年も聖書から離れてごらんさない。一年も新聞ばかり読んで暮らしてごらんさない。そうしたらもう聖書は遠い彼方に消えてしまいます。我々の肉というものはそういうも

のです。「肉」なる人間、生まれながらの人間というのは、肉体を持ち、心を持ち、頭脳の働きを持ち、いろんなさまざまなことができる素晴らしい存在ですけれども、それはどこまでも閉ざされた世界の中でしか生きられない。これをキリストは「肉」と仰った。

「人新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず。神の国を受けることあたわず」

と仰った。「人新たにうまれずば」と言われて、

「どうやって、そんなことができますか!？」

と、ニコデモは驚いた。人は「オギャー」と生まれて、成長して、そしてやがて枯れ木のごとく枯れて、死んで葬られて土にかえる。「土からとられたから、そして土にかえる」という、これが人の辿る生涯ですね、閉ざされた生涯です。始めがあれば必ず終りがある。人が「オギャー」と生まれてきたということは、墓場に向かって歩いて歩んでいる。その15、16歳位まではピークで、20歳位までは上り坂です。けれども、やがて肉体も下り坂に向かう。そして我々の思いも、どうしてもその「死」というものの壁を破れない。それから、我々のうちの「罪」という、この得体の知れないものの力に勝てない。

「罪」の問題を全く考えない方は幸せだと思う。その人は肉体のことだけを考えていたらいいんだから。何が美味おいしいか、どこにどんな面白いものがあるか、そういうものだけを追いかけて生きている人は、私は「気楽で幸せな人だな」と、ある意味では思います。しかし、

その人が今度ヨボヨボになった時にどうなるでしょうか。己のことだけを求めて生きた人はどうなるでしょうか。それは保証の限りではありません。

「結局、つまらなかつた。すべては過去だ。今はつまらない。体からだもいうことがきかない。ヨボヨボだ。自分の愛するものはみな死んでしまった。誰も自分のことを構ってくれない。当たり前だ。私は人のことを構わないで生きてきたから、自分のことだけを求めてきたんだから」

ということになりそうですね。ま、そんな極端な人はいらつしやらないでしょうけれども。我々、人間存在というものは単に生物学的な人間として、生命あるものとして生きるだけでなく、幸か不幸か、その良心というものは、善と悪というものを自分で判断する。善を欲し、悪を退けるといふものが心にしみ込んでいる。ところが、

「欲する善はこれを為なさず、欲せざる悪これを為す」

という悩みをかかえてしまっている。聖書の中では特にローマ書なんかがそうです。この「罪と死」という問題をローマ書は真つ正面から取り上げて、モーセ以来の「律法おきて」を満たすことによつて「罪」を乗り越える。そして死を乗り越える。「永遠の生命」に生きる。律法による「義」の道、これが旧約聖書の道だった。それはモデルとして示されたけれども、到底到達することのできない描かれた理想界に過ぎなかつた。それは自分たちの惨めみじさを証明するのみに、その嘆きがローマ書の特に7章にピークに達している。

「噫、われ悩める人なるかな。この罪の力、死の力から私を解放してくれるのは誰か？」

と言つて、パウロは叫んでいます。彼はとりわけ罪の問題に対して敏感で、

「私は律法の義につきては責むべきところなし」

というふうと言つたほどの、律法を全うしようと思つて奮闘した。ところが、自分はずます奮闘すればするほどそこから遠いということ、人に冷たいということ、人を審くということ、ステパノのような愛の心が無いということ。その分裂にあのサウロ(後のパウロ)はとても苦しかったと思うんですね。とうとう、ステパノが石打ちにされる時に、それをよしとした。ステパノが輝いて殉教していったあと、狂えるごとくに彼はキリスト教徒迫害の急先鋒でした。そしてあのダマスコ途上で復活のキリストにやられた。白昼の光となつて現れたキリストに、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と、ぶつ倒されて、三日間、目が見えずものが言えず——まるでヨナがクジラの中にいたような——暗闇の中を三日間過ごし、そしてアナニヤの按手を通して新たに生まれ変わった。

「人新たに生まれずば……」

ということパウロは現実に体験させられて、そしてアラビヤの野で深く折つた。十字架というものがわかつた。自分たちが十字架につけたキリストは、実は私たちの罪と死を全部背

負つて、十字架に懸かつてくださったんだと。

隠れたる神

これは単なる出来事ではなかつた。出来事としては、新聞記事に載るような、ナザレのイエスという方がこういうプロセスを経て、あのような無惨な死をとげて墓に葬られた。そこまでは新聞記事に出ます。けれどもそれ以後の、復活以後は新聞記事にのりません、何の証拠もないから。「人はこんなことを言い伝えている」というだけなんです。さっきのマトイ伝でもそうでしょ。ああいうことが書かれているだけであつて、誰も証明できるような形でイエス・キリストの復活の姿に出会った者はいない。「いや、私は見た！」と言つても、それはその人が見たのであつて、他の人は見ていない。エマオ途上で旅人の姿をしたイエスさまに出会つて、あのエマオの夕、食事の時にパンを裂かれる姿を見て、

「あつ、イエスさまだ！」

と思つた時に、その方はパツと姿が消えた。そして、急いでエルサレムに帰つてみたら、またイエスはそのに居られたという。これはもう新聞記事に載るような、写真で証拠を固めるような次元ではない。だから、聖書学者とかいう方々は、

「それは弟子の心の中に浮かんだ幻だろう、幻影だろう。あまりにも先生を慕う心がそういう幻を生み出したのだろう」

とか言う。何か向こうの海の上に流水の像が映るとか〔蜃気楼〕、そういうようなのがありませんよ。そういう何か、

「あまりにも追憶が強いために、慕う心が強いために、幻の姿となって先生が現れた。そしてすぐ消えた。そういうことは医学的にもあるそうだし」

とか言つて、キリストが聖書に書かれているように、ああいう姿で現れてくださったということは科学的、学問的には証明不可能な事態なんです。

だから素晴らしい。およそ神さまの次元の世界のものは、科学的な証明などで証明できるものではない。そんな安っぽいものではない。私たちの閉ざされた世界、この三次元の世界で、私たちは肉体をもつてこの素晴らしい地球を生きている。太陽の恵みで生きている。そういう次元を超えた次元から、別空間から、天界という別次元から切り込んで来てくださったのが、ナザレのイエス・キリストという霊的人格なんです。それがあのクリスマスから始まって、そして30年のご生涯を経て、最後に十字架につかれるということと終るわけです。

人が見たのは、馬槽うまぶねの中で「オギャー」と泣いているイエスさまです。12歳の時に何か大人の学者たちと問答しているイエスさま。その他もろもろの姿、伝道されてからの3年間のイエスさまの姿。これは肉の眼で見えています。それは肉の眼で見ているけれども、本質を見ているかどうか。そこに隠されているイエスさまの本当の姿を見ているかどうか。これはおそらく見ていないと思う。

出来事として、肉眼で確かめられるものはみんな見えます。けれどもそれは、それがイエスさまではない。イエスさまの本当の姿というものはどこまでも隠されている。

「隠れたる神」

なんです、イエスさまご自身が。隠れたる神です。

イエスさまというのは、本当に私は不思議なお方だと思えます。皆さん、人ごととは思わないで、自分がナザレのイエスという運命を担った人間として、この世に現れたというふうを考えてごらん下さい。いや、そのように自分の問題として受けとつてこそ、聖書は自分と一つになる。単なる歴史的記述だったら、これはもう、興味のある人が読み、興味のない者は読まなくていい書物なんです。そうじゃなくて、今、自分の中にどうやってその永遠界と自分とがつながるかということ。聖書の記述はみなそうです。

「今、あなたのことが語られている。一対一だぞ。あなたの中に切り込んできている。それをあなたは受けとるか!？」

と、こうやって迫っている。いい加減な気持ちで読めないんです、これは本当のところ。

イエスの立場に自分を置いてみて

それで、イエスさまの立場に自分を置いてみてごらん下さい。馬槽に寝ていたイエス。あれはイエスさまは全然自覚はありません。大人たちが、「お前は馬槽に寝ていたんだよ」と

言う。ものごころついて誰でも、「自分というものはどんな生まれ方をしたのだろうか、自分の両親は誰だろうか?」と、みんな気になりますよね。ルーツを探ろうとする。

「お父さん、僕はどんな生まれ方をしたの?」

「うん、お前はベツレヘムで馬槽の中で生まれた。気の毒だったよ、実に」

「あ、そうなんですか……。お母さん、私はどんな生まれ方をしたの? 私のお父さんは本当にヨセフなの?」

「それは言えないね」

と、お母さんは黙らなければならぬ。そうでしょ。まさか、お母さんが、

「いやあ、突然、天使が現れて、こんなことがあつたんだよ……」

と、マリヤさんはイエスに話して聞かしたのだろうか。話して聞かせたら、イエスはどんな反応を示しただろう。もし本当に話して聞かせておられたら、

「ああ、やっぱりそうだったの」

と、イエスさまが答えたかもしれない。私はそう答えられたと思う。少年イエスの不思議ないろんな姿を見えますと、もし本当にマリヤさんがそういうことを語られたとしたら、「そうなの……、うん、それはありうることね」とか、そう答えたと思うんです。

「そしたら、ヨセフは何なの?」

「育ての親だよ、肉の親ではないよ」

「そうなの。それでは、僕の肉の親は?」

「あなたの肉の親はいないんだよ。あなたの本当の父は天界にいらつしやる」

「うん……」

と。どんな問答をされたかわかりませんよ。わかりませんけれども、私はもし少年イエスだつたら、そんなことをきつといういろいろ思うと思います。誰かが、

「お前はちつともお父さんのヨセフに似てないじゃないか。本当にお前はヨセフを

お父さんと思っているの?」

とか言うでしょうね。そしたら、

「お母さん、人がこんなことを言っているけど、どうなの?」

とか。これは私の想像の世界ですけども、私はやはりイエスさまというお方は本当に一方では徹底的に人間なんです。それでいながら、天から生まれたお方でしょ。かつて父と共に栄光の中にいらつしやつたお方が聖旨みむねに従つて地上に降りて来られたわけでしょ。そのことに、ある時気づかれる。伝道に出られてからも、絶えず気づかれる。そして、

「イザヤ書に書いてあるのは、これは私のことを言っている。あそこに書いてあるのは私のことを言っている」

と、全部、自分に引き寄せている。詩篇のいろんな所とか、預言者のいろんな所とかも全部、自分に引き寄せて、

「ああ、これは私のことを預言している」

と。そういうふうにして、自分というものが何者か——よく言われている「アイデンティティ」[identity 他とは異なる正にそのものである自己同一性]ですね——それを絶えず神さまとの関わりの中でしっかりと捉えておられたのに違いないと、私は思います。

そんなことを軽々しく人には仰らない。それがエマオの途上で弟子たちに、旧約聖書からずうつと説き起こして、

「イエスはこのようにして必ず苦しみを受け、そして甦るべきではないのか」と言われた。

わが受くべきバプテスマ

イエスさまは、伝道のある時から自分が十字架にかかるということを漏らし始めました。

「これは他の人に言ってはだめだ。誰にも言ってはだめだよ」

と言いながら、選ばれた弟子には自分の奥義を語られました。ところがペテロなんかは、

「そんなことがあつてはなりません！」

と、むしろ否定してかかります。しかも聞いた時は、「ああそうか」と思っても、すぐ忘れてしまう。イエスが復活された時、女たちが墓場に行ったらイエスさまは見えなかった。

「天使たちがいて、こんなことを語り告げた」

と、弟子に伝えたら、

「たわごとと思いて、信ぜざりき」

と、ルカ伝24章の所に書いてますよ。あの十二弟子たち——ユダを除きまして残された十一弟子たち——も、イエスが甦えられたということを誰も信じなかったと書いてある。そのくらい、我々の肉なる思い、肉なる姿というのは、天界の霊界に属する真理というものと遠い。一時的に「ああわかったよ」と思ってもすぐ消えてしまう。そして、古い肉の中に舞い戻ってしまう。それを、

「それではダメだよ、絶えずあなたは御国を思いなさい。キリストをいつも思つていなさい。キリストといつも一つでありなさい」

と言つて、私たちの中に、あなたの中に切り込んで来てくださるのが聖霊というお方なんです。聖霊というお方があなた方一人ひとりの中にお宿りくださって初めて、天界とあなたとが本場に太い絆で結ばれる。だから、小池先生が「聖霊、聖霊、聖霊」とあんなに仰る。

しかも、聖霊はどうやってあなたの中に宿つてくださるか。これは聖旨だから宿つてくださるんですけれども、聖旨だからすぐ宿れるなら、イエスさまは十字架にかかる必要はなかった。イエスさまが3年間、弟子たちと一緒にいて天国のことを語り、父の神さまのことを語り、いろんな不思議な業をなさり、

「これは徴だよ、徴に囚われないで、本当の奥義をつかまえるんだよ」

と、いくらお語りになっても、弟子たちはそれを信じなかった。弟子たちが本当の奥義をつかめるようになったのは、ペンテコステ以降なんです。ペンテコステで聖霊が降^{くだ}った。

「この火既に燃えたらんには、われ何をか望まん。しかし、それまでに私が受けるべき血のバプテスマがある。十字架という血のバプテスマを受けなければ始まらない」

と言って、イエスは悩まれた。

「思い迫ることいかばかりであるか。我には受くべきバプテスマあり」

と。それがあの十字架です。四つの福音書が語り伝えていますが、十字架の血のバプテスマをキリストは受けてくださった。

「どうぞ、彼らを赦してやってください」

と、七つの言葉を語って、そして、

「わがこと終りぬ。わが霊を御手^{みて}にゆだねます」

と言って、息絶えられた。その出来事を通して、

「聖所の幕がまつ二つに裂けた」

という。「聖所の幕」というのは、この世と神さまの天界、神さまとの間を隔てている幕なんです。年に一回、大祭司が動物の血を携えて、ただ一人その幕の奥に行けた。そして、自分に血を注ぎ、民に血を注ぎ、そこで贖いをやっていた。それはシンボル (symbol 象徴) に

過ぎない。動物の血が我々の罪を潔めるはずがない。我々の死を生命に転換するような力を持つはずがない。けれども、シンボルとして毎年一回やっていた。ただ一回、大祭司が入って行けるだけで、普通の人は入って行けない。ところが、十字架のあの瞬間に、聖所の幕が二つに裂けて、隔ての物がなくなつたという。天からこの地界への道が開けた。

「我は道なり」

と仰つたその道がここに通じたんです。

「私は道だ、真理^{まこと}だ、生命^{いのち}だ」

と仰つたその本質がご復活という姿で現れた。あれはイエスさまの中に隠されていた本質が露^{あら}わな姿で現れてきた。あの十字架という血のバプテスマがあつて初めてイエスさまの本質が露わな姿で現れたのが復活のイエスさまなんです。あれが本当のお姿です。それまでのお姿は仮のお姿で、隠されたお姿です。肉体をまといつておられるがゆえに、弟子たちには、人々には肉体のイエスさまは見えます。けれども、イエスさまの本質は隠されている。

「汝らは見えども見ず、聞けども聞かず」

と、隠されていた。それが十字架を通過して、贖い業を終えて、神の御力によって、聖霊の御力によって、霊体という本当のお姿で現れられた。

あれは肉体までも変貌したんです。私は、イエスさまのお体^{からだ}は墓に残つたままで、霊体となつてイエスさまが現れてくださったでも、まことにそれでもいいと思うけれども。もう肉体

までが変貌して、死体が見つからないと言うんでしょ。肉なる体までも霊化された。そして、本然のお姿がああいう「復活」と呼んでいる姿で、栄化されたお姿で現れた。これはかつて父と共に持つておられた栄光のお姿があの時現れたんです。だから、弟子たちはそれを見て喜んだけれども、それは弟子たちの目が開かれたから見えた。喜んだけれども、それはまだ現象として見るだけです。だから、本当に内側に永遠の御姿として宿るにはペンテコステが必要だったわけです。

永遠の現在

歴史的にはそういう順序でこのドラマが展開していきました。それを過去のドラマにしてはいけません。過去のドラマなら、歴史と共に消えていきます。日々に新たな出来事が起こりますから、新聞記事に五段抜きで書かれたものも全部あなたに追いやられてしまう。けれども、あそこで起こったドラマは神さまのドラマですから、我々の中に切り込んできて、

「これは永遠だ。この世のものは過ぎ去っていく。しかし、私という存在、私というものが語った言葉、これは過ぎ行くことなし」

とそう言つて、我々に迫ってきてくださっている。そういうふうにはイエスさまを受けとらなければ、本当に受けとつたことにならない。復活の主に出会つたことにならない。

そして、復活の主は天にのぼられた。四十日の間、弟子たちに度々現れて、御言を語り、

それから天にのぼられた。そして、

「お前たち、祈つておれ」

と。十日間祈つていた時に、あの火の如きバプテスマが起りました。聖霊のバプテスマです。これを今、私たちには瞬間にして起こしてくださるんです。

あれは歴史的な出来事のような時間的順序をもって、イエスさまがお生まれになり、地上を歩み、十字架におかかりになり、ご復活され、40日間地上におられ、そして天界にのぼられて、十日後に聖霊となつて降くだつてこられたというプロセス。これが今度は、私たちにとりましては、永遠の霊界の、永遠の現実として、根源現実として常に新たに、日々に新たに迫ってくるんです。過去の出来事ではなくて、現在の出来事として迫ってくる。

そして、将来に私たちは神の国を受け継ぎます。新天地が形成されます。その時の我々の姿も今、現在の中に迫ってくる。だから、現在というものは常に「永遠の現在」なんです。永遠の現在、それは聖霊がそれを我々に自覚せしめてくださる。その聖霊がどうやって私たちに宿つてくださるかというのと、

「十字架で土台を築いた。十字架で道を開いた。十字架は過去の出来事ではない。あなたを贖い、あなたの中に聖霊という姿で私が宿るために、私は十字架にかかつた。あなたはこれを受けとるか」

と、こう言つて迫つてくださる。

「あなたは受けとるか。十字架は汝のためなり。私はあなたを愛した。その愛を具體的に表した。それが十字架の血のバプテスマだ。あそこであなたは葬られた。あそこであなたは死んでいる。もうあなたは生きていない。私の甦りと共にあなたは新しく甦った。あの十字架であなたは死んだ。それを今、受けとってごらん。あなただの根源現実として、それを今しつかり受けとってごらん。気づいたその瞬間に、私は聖霊という姿でもってあなたの中に宿っているよ」

と。十字架と聖霊は即なんです。イエスさまという存在もそうです。小池先生はよく、「イエスさまは無者だ。イエスさまは神さまの前に自分を空っぽにして、投げ出している無者だ」

と仰った。空っぽで、神さまの前にすべてを明け渡しているその「無者」——「無即無限無量者」という——無者になって数時間後に神さまが入って来られたのではない。無者の姿に徹せられたその時に神さまは充滿してしまった。

「幸いなるかな、霊の貧しき汝よ」

と仰っているけれど、その前にキリストご自身が霊貧しく空っぽだった。

「瞬時に聖霊という天国が私の中に宿った」

と。これは具体的にはヨルダン川でバプテスマをお受けになった時に、

「水からあがられたら、霊界の天が開けて、聖霊が鳩の如く形をなしてイエス

の中に宿った」

という歴史的な出来事がありました。それからのイエスさまは祈ればいつも、祈っていらつしやるということは、神さまに明け渡しておられるという姿です。

「あなたの御意を成してください。あなたの御意をお示してください」

と言って、肉体のイエスさまは、我々と同じ姿のイエスさまは、霊の次元では常に神さまの前に自分を空っぽにして、

「父よ、汝の御意を。私は僕です」

と言って投げ出しておられた。その時に、ゼロなるイエスさまに無限無量なる神さまが宿っておられた。全智全能なる神さまが宿っておられた。だから、片っ端から御業が展開しました。無即無限無量だった。永遠の生命が宿っていた。そのイエスさまの中に宿っていた永遠の生命すらも、キリストは十字架に付けてくださった。私たちと一緒に十字架にかかっていた。独りでかかってくださったけれども、「その時にあなたたちを抱きしめて一緒に十字架にかかった。あそこであなたは葬られている、死んでいるよ」と。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず」

という。「水の洗礼」というものを教会の方々はみなお受けになりました。これはシンボル(象徴)です。何のシンボルか。イエス・キリストの死に合わせられるバプテスマです。それは生命に甦えらんだためなんです。キリストが復活された時に私たちも、死に合わせられた私た

ちは生命にも合わせられる。

サタンが操ってやらせている

ローマ書6章の所にそのことがはつきりとうたわれています。

「³なんじら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは、その死に合うバプテスマを受けしを。⁴我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。これキリスト 父の栄光によりて死人の中より甦えらせられ給いしごとく、我らも新しき生命いのちに歩まんだめなり。」(口

マ6・3〜4)

「新しき生命」とは復活の生命、イエスキリストのあの栄光体です。あの姿に歩まんだめなりと。「死に合わせられる」ということはまだ前半、半分です。本当の目的は、

「新しい生命に活かされる」

という、こつちが本体です。これが目的なんです。この本体が成就するためには、どうしても通らねばならない死というものがある。それは私たちが自分で死ぬのではなくて、イエスキリストが代わりに死んでくださって、

「そこであなたも死んでいるよ」

という。これが恵みなんです。私たちがいくら自分で自分を殺しても、肉体を殺しても、そ

れで甦らされることはありません。自殺はダメです。自殺したら甦られるか、ダメです。自分で自分を死に追いやってダメです。それはイエスキリストだけが、

「もうあそこでああなたは死んだ。あなたは自分が辛かろう、自分が嫌だろう。気持ちちはわかる。でもあなたが死んで何になるか、陰府よみに下って何になるか。サタンに負けるな。私は十字架でサタンに勝った。あそこでああなたも一緒に死んだんだよ」

と。この私たちが生きている現実というのは、見えないだけであって、神さまからの光、神さまの聖霊の力と、サタンという陰府の力とが闘っている。人は、

「ああそうだよ。神さまの力は、神さまは愛しておられるから、我々に力を下さっている。神さまは絶えず働きかけて、私たちを守ってくださいているよ」

ということを受けたるんです、クリスチャンは。けれども、サタンの力がどんなに今、狂おしくこの地上を惑わしているかということに思いを致さないから、判断を誤る。サタンは侮あなどるべからず。戦争を起こし、クリスチャンを使って爆撃を行わしめ、それをやっている人は真剣に、「正しいことをやっている」と思っているけれども、誰も止められない。全部、サタンが操ってやらせている。我々がいくら「平和運動だ、何々運動だ」と言っても、やりましても、サタンは喜んでるんですよ、「やらせろ、やらせろ」と。そういう次元を突き抜けた所から本当に聖霊の力に乗っかって、

「人々の心に聖霊を！」

と、これが本当の平和運動です。キリストの人格に化せられていく、靈的人格に化せられていく。これしか望みはない。我々は百歳生きようと、千年生きようと、本当にキリストの聖靈の生命が宿らないこの地上というものは、偽りの楽園にすぎない。ヨボヨボの人間ばかりが千年生きていてどうしますか、文句ばかり言っている人間が、エゴイストの人間が。口では美しいことを言っても、結局はエゴイストなんです。自分ばかりが可愛かわいい。自分によくしてくれる世の中は可愛いけれども、ちよつとでも非難されたらもう世の中を蹴飛ばす。そういうのが人間性なんです。その人間性を讃たたえていたらダメです。口ではきれいなことを言っても、心は反対なんです。

もうそんなことは社会主義国、共産主義国の独裁者の国々の姿でわかりますでしょ。どんなに口でいいことを言っている、一部の階級が特権を握って、金の御殿に住んで、自分だけがいい思いをして、そして自分たちのことを悪口いう奴は即刻処刑して、100%支持させて、みんな恐いからものが言えない。恐怖の中に追い込んでいく。それがイスラムであるのか、共産主義であるのか、何であるのか、イデオロギーは何であれ、結局、人間のエゴというものを本当に解決していないイデオロギーはすべて行き着くところはそこなんです。それを操っているのはサタンなんです。人間は操られているだけです。

私にはそう思える。だから、我々は突き抜けた世界でこの世を見なければならぬ。突き抜けてくださるのが聖霊なんです。黙示録を読んでご覧なさい。恐ろしい世界が展開し

ています。黙示録は暗号に過ぎません。

「海の三分の一は血に染まる。三分の一の人間は死ぬ」

とか、実に恐ろしいことが次々と描かれています。あれは暗号です。暗号なんだけれども、それと質的に似たようなことが地上でますます起ころうとしていますでしょ。

生物化学兵器なんていうものによつてバイ菌がばらまかれたら、いったいどうなると思いますか。例えば京都だったら、琵琶湖が汚染されたら、もう我々京都も大阪も全部、琵琶湖の水で生きている者たちは生きて行けないことになる。海が汚染されたら、もうどうにもなりません。空気が汚染されたら、どうにもなりません。そんなことがその気になればできる状態が起こっているわけです、空中からサリンを散布したら。そういうものが起こらないようにということ、一生懸命に一方では防ごうとしている。しかし、他方ではそれを起こそうとしている。そういう物凄く人間を脅おびやかす悪の靈力、これがサタンです。これが人々を操っています。そういうことを起こさしめている。

ですから、この地上の出来事というものは、その地上だけを見ていたのでは、とても判断できないと思う。私は地上のことを判断する面では無能力者であるとはつきり言う。私にはわからぬ。それを判断できるほど私は賢くない。私はいよいよキリストに祈り込み、そして自分のできるところで、本当に自分の助けを求めている人に「善きサマリヤ人」となつて、一緒にキリストの生命を生きる、それを分かち与える。たとえ私の肉体がサリンによつて朽ち

果てても、私の霊体は朽ち果てない。

「第一のアダム」と「第二のアダム」

「42 死人の復活もまた斯くのごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦え
らせられ、43 卑しき物にて播かれ、光栄あるものに甦えらせられ」（コリント前
15・42〜43）

とコリント前書15章の復活の所に書いてあります。あなた方の播くものは何か。麦を播く。
種は朽ちる。ところが、朽ちないものが出てきているではないかと。

「己を保たんと思う者はこれを失い、わが為、福音の為に己を棄ててかかる者
は永遠の生命を得る」

とキリストは仰った。そして、キリストはそれを実践してくださいました。キリストの十字架の
死という尊い死によって、本当に天と地との間に太い道が開かれた。

「我なり、懼るな。心安かれ！」

というキリストは道となってくださいました。道というのは私たちが踏みしめて行く道なんです。
イスラエルの人たちが紅海を渡って行きましたね、自分の足で踏みしめて。畏れ多くも私た
ちは、キリストというお方を踏みしめて行くと、「私の背中を踏んで行け」と言って、キリ
ストは道となってくださいました。

「それを踏んで歩いているうちに、あなたもキリストの姿に化せられる。踏みしめ
て歩いて行く原動力は聖霊だ。それをあなたに与えた。あなたが十字架を本当に受
けとったその瞬間に私は聖霊という姿でああなたの中に宿った。マリヤさんの中に聖
霊が宿って受胎が起こったように、あの十字架の死を受けとったあなたの中に、私
の聖霊という生命が受肉して宿った。そして新しい生命に歩んで行くんだ。これは
見えないよ」

と。あのキリストのご復活の栄光のお姿は本当にキリストの本来の姿が現れたに過ぎません。
だから、それに出会った弟子たちは幸せでした。いや本当なんです。あの山上で変貌され
た時、あの時も眩い姿になられた。あれもたった三人の弟子がそれを見ただけです。私たち
にその見えないものを見せてくださるのが聖霊なんです。ヨハネ伝にあります、

「聖霊は私に栄光あらしめる」

と。ヨハネ伝の13章から17章までは、いかに主さまが別れにあたって、聖霊のことを仰って
くださっているか。

「真理の御霊をあなた方に与える。助主を与える。この方がすべての真理へと
あなた方を導く。今まで私が語っておいたこと、それを全部甦らせる。そして、
その本当の奥義をつかませる。これは聖霊だよ。あなたたちを決して孤児にし
て棄て去らない。私は行つて所を備えたら、必ず帰ってくる。そして、父と私

「はああなたの中に一緒に宿る。我らはあなたたちの中に住処を共にせん」と言っただきつている。

さきほどのローマ書6章をもう少し読んでおきましょう。

「4……我らも新しき生命に歩まんためなり。5我らキリストに接がれて、その死の状にひとしくば、その復活にも等しかるべし。

接ぎ木というのがありますね。この肉なる私たち「第一のアダム」が、「第二のアダム」でありたもうイエス・キリストの十字架の死に接ぎ木されると、私たちは彼と共に葬られ、そして、彼の復活の姿に化せられる。

5我らキリストに接がれて、その死の状にひとしくば、その復活にも等しかるべし。6我らは知る、われらの旧き人、キリストと共に十字架につけられたるは、罪の体ほろびて、

この罪の体、「第一のアダム」がほろびて、こののち罪とは無縁の新しい「第二の新生アダム」——それはキリストと同質です——そういう姿に生きんためなり。もうあそこで十字架でほろぼされた私たちは罪の力から解き放たれている。

此ののち罪に事えざらん為なるを。7そは死にし者は罪より脱るるなり。8我等もしキリストと共に死にしならば、また彼とともに活きんことを信ず。9キリスト死人の中より甦えりて復死に給わず、死もまた彼に主とならぬを我ら知

ればなり。10その死に給えるは罪につきて一たび死に給えるにて、その活き給えるは神につきて活き給えるなり。

神さまの中へと生きておられる、義の中に生きておられる。

11斯くのごとく汝らも己を罪につきては死にたるもの、

過去の私たちの旧き我を「罪」というふうに表示します。それに対してはもう死んだ者、そこから解き放たれた者。そして神につきては、

神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思うべし。」(ロマ6・3〜11)

神の中に生き給うたキリスト、神に対しては、キリストのお陰で、キリストにいだかれ、そして「活きたる者」、これがあなたの本質だという。肉における限りは、こんなことは受けられない。しかし、助主、聖霊が来てくだされば、

「誠に然り、アーメン。これが私でした。ああ、神の恵みは山よりも高く、海よりも深く広い」

ということを実感させてくださる。

ローマ書8章へ行きますと、我々は「肉と霊」の二つの姿で生きているという。生まれながらの「第一のアダム」は「肉」なる我、これは律法を全うできなかった。しかし、

「第二のアダム、これは霊なる私たち、これはもう天国直結だ。この霊なる姿の私

たちでありさえすれば、あなた方は永遠の生命だ。旧き第一のアダムに舞い戻れば、それは死であるぞ」

と。この地上の生を生きている限りは二重人格です、我々は。二重性を持つている。この地上を宿としている限りは、「第一のアダム」に舞い戻ることも自由だし、キリストの「第二のアダム」の中に生き続けることも自由だし、それはあなたの選ぶところである。我々は旧きを棄てて新しきに生きる。

「誰でもキリストにあるならば、新しくせられたる者なり。旧き^{ふる}は過ぎ去った。

視よ、一切は新しくなりたり」

と。絶えずその中に自分を向けていかないといけない。私たちはその努力をしなければいけない。絶えずキリストさまに向かうという努力をしなければいけない。永遠の生命そのものは努力では得られない。でも、

「永遠の生命を下さった」

というその現実^{じじつ}に生きる努力はしなければいけないんです。

朝ごとに、旧き自分に戻るのか、キリストの新しいところへ行くのかと、朝ごとに私たちは決めていかなければならない。だから、ヒルティも言っています、

「朝、目覚めた時に自分がどう思うのか。これに生きるか。これが決定的に大事だ。朝、目覚めた時に過去の忌^いまわしいところへホイと思いが行ってしまうと、その一日は

もう汚されてしまう。朝、目覚めた時に、神さまの中へスーッと入れたら、その一日は勝利だ。勝負は朝で決まるよ」

と、ヒルティは経験から言ってくれている。だから、「聖書を読まなくては」と無理に思わなくていい。「主さま！」と叫べばいい。

「主さま、ありがとうございます。主さま、あなたによって目覚めさせていただきました。夜ちよつと恐い夢を見ただけでも、もう主さま、目覚めたらもうあなたの中です。もう旧きは過ぎ去りました。大丈夫です」

と言って、主さまにご挨拶しないといかん。我々は人さまには挨拶します、「おはようございます」と。先ずご挨拶するのはイエスさまにです。「ありがとうございます、目覚めました。外は雨ですけども、あなたにあつたら晴です。ハレルヤー！」とか言って（笑）。晴れてたら、ますます「ハレルヤー！」とか言っつてね、そうやってイエスさまにご挨拶して、イエスさまの中に生きていく。

「そうだよ、そうだよ。今日も一緒に行くんだ。力を与えるよ」と。「主の祈り」がありますね。

「私は無力です。あなたの御力で歩ましめてください。私は大それたことは望みません。私のすべきこと、「お前の今日やることはこれだよ」と仰ったことに私は全力投球いたします。どうぞ、それをやらせてください」

と言って、ことごとくに主さまの導きのもとに歩んでいく人生。それが新しく生まれた私たちの人生なんです。

もしイエスがエゴイストだったら

旧き私たちは自分で計画し、自分の思いに従って行動し、そして「成功した」と言っては喜び、「失敗した」と言っては嘆く、これが旧き私たちの歩みでした。「病気になった」と言っては心配し、「治った」と言っては喜ぶ、そういう私たち。それが「第一のアダム」としての私たちの営みなんです。多くの人はその営みの中に終始している。けれども、

「そういう営みの中に閉じこもっている、あなたに永遠の生命はないよ」

と言って、天国から、神さまの世界から急降下しておりてきて、道を開いて、

「ここに生きるんだよ!」

と言って示してくださったのがイエスさまです。その他にどなたがこんな道を開いてくださったか。具体的にですよ、「具体」というのは体を具そなえてです。我々と同じ姿で、我々と同じ人生を歩みながら、しかし、それを乗り越えた次元を絶えず徴を通して示してくれた。

ラザロの復活の姿、あんなことは普通の人間にはできっこありませんでしょ。さつき死んだ人間ならまだ、霊が戻ってくれば生き返りますよ。四日経って肉体が朽ち果てようとしているものを元の姿に戻すという、そんなことはできることはありません。しかし、あのラ

ザロの復活だって、結局考えてみたら、元の姿に戻っているだけで、永遠の生命ではない。ラザロの元の姿であつて、第一のアダムの姿にまだ留まっている。あれはシンボルなんです。

「キリスト・イエスにある者は永遠とこしえに死なず。我を信ずる者は死すとも生きん。

およそ生きて我を信ずる者は永遠に死なず。汝、これを信ずるか」

と言われた。これは、

「あのラザロの復活以上の世界を与えるぞ」

という、そのいわば徴としてラザロを甦よみがえらされた。

「永遠の生命というものは、もつと凄いとんでもない、驚くようなことだ。驚くよ

うなことしか神さまはなさらないよ」

と。そういう神さまの驚きの世界です。喜びの世界、生命溢れる世界。これを人間は憧あこがれながら、実は諦あきらめていた。憧れてはいたけれども諦めていた。それが本当に弟子たちの目の前に示された。すると弟子たちは、

「たわごとだと思つて信ぜず」

と。こうでしょ。それで、パウロは言います、

「イエスが甦よみがえられなかつたら、我々も甦よみがえることができない。イエスさまがあのような姿で現あれたらということとは決定的に大事だ。あれが起こっているから、我々も同じ姿に化せられる」

とコリント前書で言っている。もし、イエスさまがエゴイストで、「私はもう天の父と一緒にいたい、もうこんな人間どもは放っておいて。しばしば地上で現れてしゃべったけれども、あいつらは全然聴きません。あんなやつらはもう棄てますよ。お父さん、私はあなたの所へ帰りたい。」と言って、スーッと天へ飛んで行ったら、それで終わりだった。しかし、

「本当に十字架を受けなければならぬんですか」

と祈られた。小池先生が作詞された召団讃歌A5番「わがみ神よ」は素晴らしい讃美歌です。これは聖書の大奥義をつかまえた讃美歌ですよ。

「なぜイエスは十字架にかからねばならなかったのか。どうしてそれをイエスは受けたのか。そしてその贖い業を終えて、本当に霊体として栄光の姿で現れて、そして天に昇られて、聖霊を降し、世の終りまでイエスは働いておられる。私たちを通して働いてくださる」

という、そのイエス・キリストのことをあの讃美歌ですつと歌っている。

〔註：A5「わがみ神よ」(讃美歌320「主よみもとに」の曲で)〕

- 1 わがみ神よ十字架の この苦杯を取り去り み許にゆき父と共に とこしなえに在りたし。
- 2 されど我はみ父の み旨により十字架を 負いて往かんゴルゴダへと 我を棄てて従わん。
- 3 主の十字架のかたえに 悪しき者ら懸げらる 驕る心砕ける胸 これぞ人類の分かれ目。
- 4 主言い給う砕けの 胸の者に「汝は 我と共に今日この時 パラダイスに在るべし！」。

- 5 午後の三時天地は 雷鳴のため晦冥、いならずま飛び地震振えり 歴史を絶つ微候ぞ。
- 6 十字架の主は叫べり エリエリレマサバクタニ 更につづく大音響 聖所の幕は裂けたり。
- 7 主は十字架を荷いて あがないわざ果たして 甦りて現れたり マグダレナに最先に。
- 8 復活の主は昇りて 神の右に坐したり み約束のみ霊降だす 時を待ちて祈り給う。
- 9 聖霊は火か疾風か 祈る群に臨めり ペンテコステのバプテスマぞ！ エクレシヤは成りたり。

それから、A6番「神を無みして」では、

「人間どもよ、本当に目覚めろ。本当に根源に帰らなければ何をしても結局それは無駄に終る。根源のところへ帰れ。神を無みしていたらダメだ。そこへ帰れ」

ということを歌っている。

〔註：A6「神を無みして」(讃美歌260B「千歳の出石」曲で)〕

- 1 神を無みして万ずの事を いか謀るも空の空なり ああ亡びゆく文明文化。
- 2 剣を執れば剣に亡ぶ 万ずの国は自滅への道 ああ人の世の罪ぞ果てなき。
- 3 世紀の終末近づきたれば 心を裂きて神に帰れよ！ 三次大戦いつかは知れず。
- 4 大和島根の人よ醒めよ 古来われらは道の民なり 今こそ受けよキリストの道。
- 5 預現者どもも主の使徒たちも 亡びゆく世に真理の道の 証を立てて世を去りゆけり。
- 6 幼児どもに国境なし イデオロギーの限界を悟り 人間に帰って手を握り合え。
- 7 人はもと霊止神仏なり 万象帰一物心一如 万ずの人よ相抱けよや。

8 歴史の終末明日に迫るも 主にこそ在りて人をば愛し 今日一日を千年と生きん。」

それで、私たちは、クリスマスであるとうと、復活節であるとうと、ペンテコステであるとうと、いつも中心はイエス・キリストというお方へ帰っていきます。イエス・キリストこそは父の御意を体現して、我々の前に現れてくださり、そして、我々どうしようもないやつどもを愛して、十字架にかかつて、そしてあの栄光の姿で現れて、

「その栄光の姿にお前たちを化すまでは終らないぞ」

と、世の終りまで祈り続け、我々のうちに宿り続け、働いてくださる。素晴らしいお方です。

死によって閉ざされている世界

ルカ伝24章の所を見ます。

「1一週ひとまわりの初はじめの日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。2然るに石の既に墓より転まろばし除けあるを見、3内に入りたるに、主イエスの屍しかばね体を見ず、4これが為ために狼狽うろたえおりに、視よ、輝ける衣きを著きたる二人の人その傍かたわらに立てり。5女たち懼おそれて面おもてを地に伏せれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。6彼は此処ここに在いまさず、甦よみがえり給えり。』」
(ルカ24・1〜6)

23章の終りの方では、イエスの屍しかばねをアリマタヤのヨセフが、議員で身分が高かったので、

ピラトに願ねがい出て、その屍を十字架からおろして葬くわつたということがあります。

「51……ユダヤの町なるアリマタヤの者にて、神の国を待ちのぞめり。52此の人ピラトの許もとにゆき、イエスの屍しかばね体を乞ねがひ、53これを取りおろし、亜麻布にて包いみ、巖いわに鑿ほりたる未だ人を葬りし事なき墓に納めたり。54この日は準備日なり、かつ安息日近づきぬ。55ガリラヤよりイエスと共に来りし女たち後に従い、その墓しかばねと屍しかばね体の納められたる様とを見、56帰りて香料と香油とを備う。かくて誠命いましめに遵したがいて、安息日を休みたり。」

1一週ひとまわりの初はじめの日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。」(ルカ23・51〜24・1)

ここまででは、いうならば肉の次元というか、我々の住んでいる次元の振る舞いです。アリマタヤのヨセフや女性たちも誠心誠意にイエスさまに誠を尽くしている姿です。そして、安息日だから香料を塗ることができない。安息日が終つたら、一番にお墓に行つて死体に油を塗つて慰めて差し上げようというふうには、どこまでも慕わしいイエス・キリスト、我々と一緒に歩んでくださったイエス・キリスト、人間としてのイエス・キリスト、先生としてのイエス・キリスト、しかし無惨にも十字架で殺され、その死体を私たちがあずかつて墓に葬つた。これに香油を塗つて、できる限りのことをして差し上げよう、花も備えようと、そういう閉ざされた思いの中に生きている。誠心誠意に。それが行つてみたら、墓は空っぽだった。「何

だろうか、これは!?」ということで、この女たちはうろたえたという姿があります。うろたえていたら、輝ける衣を着た二人の人が傍らに立っている。ますます恐れた。これは何ごとかと。そしたら、二人の者が

「なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか」

と。非常に象徴的な言葉です。「死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか」と。私たちの生きていますこの地上の世界は、「死にし者ども」の世界なんです。結局は、死というものによって閉ざされている世界です。さつきから言いました、追憶の中に生きる世界なんです。命日ごとにお墓に行つて、その人を追憶し、花を捧げる。もう屍しかばねも何もありませんけれども、追憶の中に生き、そして、「私たち生き残つた人間は立派に生きますから」と言つて誓いをたてる。やがて私たちも死んでいくという、閉ざされた世界なんです。ところが、天使は「どうして、その中あなた方は留まるの? イエスさまはその中にいらつしやらないよ。別次元の生命の世界に生きておられる。その次元をこそイエスさまはあなた方にもたらしただけではないの? どうして目が覚めないの? 目を覚ましなさい!」いつまでも第一のアダムの世界に留まっていたのはダメ。第二のアダム、永遠の生命、霊体をもつて現れてくださったその世界こそが、神さまがあなた方一人ひとりに与えようとなさっている本もの世界だ。あなた方は本ものに出会いなさい。この地上は、本ものに出会うための第一のステージにすぎない。第二のステー

ジに進みなさい!」

と言つてくれている。

「朽つるもので播かれ、朽ちないものに甦よみがえる」

という。第一のアダムは死をもたらしした。第二のアダムは生命をもたらしした。これが神さまの御意みこころだと。キリストは、

「我は道なり、真理まことなり、生命いのちなり」

と言われた。

「私は本当の道、神さまの道であり、人が生きる道であり、私たちが踏みしめて歩くその人生そのものである。そして、本ものだよ」

という。「本もの」というのは、見える所の奥に隠された永遠なるものである。

「本ものは朽ちゆかないものだ、人を活かす愛だよ。そして私は永遠の生命だ」

と。だから、「我は道なり、真理なり、生命なり」というのは貫いている一つの事柄なんです。イエスさまの本質の一つの事柄が「我は道なり、真理なり、生命なり」という言葉で表されている。これに我々が化せられ、これと一つにされる。そしてイエスさまと同じ姿に変貌する。そのための十字架であり、聖霊のご内住です。聖霊がそれをしてくださる。

新しい天命に生きる

ローマ書8章をみますと、

「この聖霊は我々の死すべき体からだを活かし給う」

と書いてある。

「我々は所詮、死ぬべき体だ。しかし、その死すべき体をなお活かし給う、な

お甦らせ給う」

と、そういうことが言われています。私にとってはもうこの聖霊なる主さま、このお方が我々一人ひとりの中に内住くださる。それは私たちにはいかなる根拠もない。「善人だから、これだけ努力したから」とか我々の側には何の抛り所もない。一方的な主さまのご愛です。それによつて万人が救われる。これがまた受けとりにくいんですね。本当に理性的に考えたら、なぜイスラエルであのように起こったことが、今の私にそんなに深い関わりがあるのか。何か「アーカイブ」とかいってテレビ番組があつて昔のものを呼び覚まして今、上映してくれているけれども、

「昔あつたことがどうして今、私たちに関わりがあるのか。あれはイスラエルで昔起こつただただの歴史的出来事なんですよ。それがどうして今の私たちに関わりがあるのか。仮に関わりがあるとしても、何十億という人間がいて、なぜ私なの？」
というふうに思いますよね。それに対して私は申し上げたい。

「太陽をご覧なさい。天界の太陽を。太陽の光は、何十億年の昔から地球を照らし続けている。地球には何十億の人がいる。昔の人も今の人もみんな太陽の光を一人ひとりが愛して生きてきた。今もそうだ。戸外に出てごらん。雲間から太陽の光が射してきたら、暖まりを感じるでしょ。あの太陽が地球上の何十億という、過去から現代までの人たちを照らし、生命づけてきた。肉体の生命ですら、たつた一つの、まるで永遠の実在者の如き太陽というこの存在によつて生きてきたのではないか。ましてや、霊界の太陽であり給うキリスト・イエスさまは我々一人ひとりを活かさないはずがあるうか」

と、こう私は言いたい。正に自然界の太陽は、キリストのシンボルとして、キリストを指し示す誠に素晴らしいシンボルとして、今も永遠に照り続けてくれている。

「その暖まりを蒙こうむらざるものなし」

と詩篇にあります。そのように、復活のキリスト、霊界のキリスト、永遠界のキリストが今、聖霊という姿で一人ひとりの中に宿り給う。「私なんか」と言う前に、

「あなたは私と一緒に十字架につけられた。もうあそこで一緒に、あそこで運命共同体になつてしまった。あなたは気づかなかつたかもしれないけれども、あなたの生まれる前から私はそうしたんだ。あなたの生命はあそこにあつたんだよ、実は。あなたの知らない時に、あそこでああやつてあなたを愛して、あなたを贖つた。よ

くぞ今、気がついてくれたね。さあ今、あなたの中に宿った。これであなたと本当
に一つになれた。さあこれから一緒に生きるんだよ」

と。そういうキリスト族、キリストの子供、神の子、これをつくる働きをずっとキリストは
してなざる。そして、神の子になつたら、我々全員を天界へ招いていてくださる。この地上
での働きを終った時は、御許みもとに呼んでくださる。

「地上にある間は御意みこころに従つて働きなさい。私も御意に従つて働いた。あなたも地
上にある限りは、私の弟子として働きなさい。第二のアダムとして働くんだけ。もう
かつての第一のアダムではないよ」

これが私に与えられた新しい使命、天命なんです。50歳で気づかれた方も、20歳で気づいた
方も、80歳で気づく方も、等しくその使命に生きる。あのマタイ伝20章に、

「朝の5時から働いた人、夕方の5時にやつと働きにありついた人、みんな等
しく1デナリを与えた」

というお話がありますね。あのように、神さまの御意を地上にある間に気づいてほしい。気
づいた瞬間に、

「あなたは生き返ったよ、あなたは甦よみがえった。あなたは放蕩息子だったけれども、
死んでいた生命が、失われた生命が甦よみがえったんだよ」

と言つて、放蕩息子を抱きしめる親父のように、イエスさまは永遠に、いついかなる瞬間に

も人に働きかけて、

「甦よみがえつてほしい。本当の生命に、第二のアダムの生命に生きてほしい」

と言つて、イエスさまは迫つておられる。これをしっかりと受けとるのが復活節なんです。

本日この時間に、皆さん、絶対に受けとってくださいたと、私は信じたい。

「いやあ、私はまだダメです」

なんて、何でダメですか。イエスさまの事実が先に先行、事実先行だよという。この事実が
単なる事実ではなく、神さまの愛の行為、神さまの愛の御業みわざが先行しているんです。

「初めに言ことばありき」
ではなかった。

「初めに行ことありき」

という。十字架の愛の御業、これが成就した。そしてご復活という事実が成就した。それを
もつて皆さんの中に入ろうとしておられる。我々は、「はいっ、ありがとうございます！」と。
「はい」と言うこと、それだけです。ヨハネ伝の始めにありましたね、

『はい』と言う者には神の子となる権を与え給えり。人の血筋によらず、肉の
願ねがひによらず、ただ神においてのみ生まれたり」(ヨハネ1・12〜13)

とあります。そのごとく、聖書はどこを読みましてもつながっている。ヨハネ伝であろうが、
コリント書であろうが、他の福音書であろうが、ローマ書であろうが、全部つながっていま

すから。それがいろんな角度から切り込んできてくれている。

「神はその独子^{ひとりご}を賜ったほどにこの世を愛してください。信ずる者の亡びずして、永遠^{とこしえ}の生命^{いのち}を得んがためなり」(ヨハネ3・16)

と。「永遠の生命」とは何ですか。さつきから申して、復活のキリストのあの栄光の姿に宿っている生命です。これを一人ひとりに与えんとして来てくださった。

そういうことで、皆さんの中にこの復活の主さまが聖霊となつて宿ってください。この十字架、ご復活、その事態を深く深く開示してください。開き示してください。ことを私は信じたいと思っています。それでは、終りといたします。

祈り

主イエス・キリストさま、十字架にかかり、陰府^{よみ}に下り、墓を蹴破つて甦り給うた、栄光の本然の姿を現わし給うた、愛の主イエス・キリストさま。ありがとうございます。あなたは私たちをあなたの永遠の生命に化せしめんとて、我々の知らざる所にて、あなたはお生まれになり、生きてくださり、十字架を負ってください、そして甦ってください、聖霊となつて弟子たちにくだり、今、私たちの中に受肉してください。感謝いたします。

我々は日々に十字架で葬られ、日々あなたと共に甦っております。
主さま、旧き我を葬り去って、

「誰でもキリストにあるならば、新しく造られたものなり。旧きは過ぎ去った。

視よ、一切は新しくなりたり」

と、そのようにして私たちは日ごとに新しく、あなたと共に歩んで参ります。

あなたの一方的な無条件のご愛を感謝いたします。誰にも等しく、

「わが意なり」

と言つて、あなたが聖霊を下さることを感謝いたします。

十字架で我々は碎かれ、あの碎かれたる罪びとの姿となつて、

「汝、今日、我と共に、パラダイス！」

という、主さまと一緒にパラダイスをいただいで、聖名を讃えつつ歩んで参ります。ありがとうございます。天界の小池先生、また、既に召されました兄弟姉妹たちと共に、また天の万軍と共に、あなたの御愛を深く感謝し、聖名^{みな}を讃え奉ります。

今日ここに集われた一人ひとり、掛け替えのない一人ひとりでございます。主さま、どうぞ、あなたの奥義を示し、限りなくあなたの愛する子として、また僕として、聖名を持ち運ぶ器としてお使いください。

主イエス・キリストの聖名にあつて、この祈りを御前^{みまえ}にお捧げいたします。アーメン。